

ドン・ボスコの風

Joyful Communication !

SALESIAN
BULLETIN
JAPAN

July 2014 No.

13

世界のサレジオ家族ニュース インタビュー

サレジオ会新総長紹介

ドン・ボスコの10番目の後継者

フェルナンデス総長の母イザベルさん

連載 インタビュー

DBの教え子たち

黒田一敬さん



第27回 サレジオ会総会
フォトダイアリー

Ciao! サレジオ家族探訪
カリタス ドン・ボスコスクール
目黒星美学園小学校

もっとキミに伝え隊!!

今回の応援隊員 田中次生 神父

特集

宣教師たち

～想いは国境を越えて～



「より神のもの、
兄弟のもの、
若者のものとなる」

サレジオ会日本管区長
アルド・チプリアニ神父

教皇フランシスコを囲んで、チャーベス前総長（左）、フェルナンデス新総長（右）
Photo by ANS

今年2月から4月にかけて、サレジオ会ローマ本部で、サレジオ会の第27回総会が開催されました。6年に一度開かれる総会には世界中から200名を超える管区長と管区代表が集まり、共に祈り、生活を分かち合いながら会の現状を考察し、将来に向けて指針を打ち出します。今回の総会は、2期までと定められた12年を務めたチャーベス総長に代わる、新総長選出の任務も帯びていました。

テーマは、「福音を徹底して生きるあかし人」。創立の原点をふりかえり、世界の現状、若者の状況についての報告や考察、教会の声、教皇フランシスコの言葉、お互いの分かち合い、祈りを通して、今、神様がサレジオ会に呼びかけていることは何か、私たちは聞き取ろうとしました。

私たちの心に響いたのは、神を中心に生きる「神秘家」、兄弟愛の「あかし人」、貧しい青少年に仕える「しもべ」になるため、より神のもの、兄弟のもの、若者のものとなるようにという招きでした。源泉であるドン・ボスコの生き方に立ち帰るように、心を開き、勇気をもって出かけていくようにと私たちは招かれています。教皇フランシスコは私たちに、惜しみなく福音を生き、若者たちの貧しさが如実に現れる場へ出かけて行くようにと呼びかけてくださいました（3月31日バチカンでの教皇謁見にて）。

新たに私たちサレジオ会とサレジオ家族を導くことになった新総長、アンヘル・フェルナンデス神父は次のように呼びかけました。「サレジオ会員は若者の皆さんの可能性を信じ、聖書の言葉にあるように、皆さんが“地の塩、世の光”であるようにと願っています。この旅を共に歩むなら、私たちの前には素晴らしい日々が待っています」。

8月16日、いよいよドン・ボスコ生誕200周年を祝う1年が始まります。今年、私は管区長としての6年の務めを終えますが、新管区長がこの希望に満ちた時に、日本のサレジアンの旅を導いてくれるでしょう。皆様の温かい応援、ご支援に心から感謝申し上げます。

2014年6月24日 ドン・ボスコの霊名の祭日に

Contents もくじ

3 Message ● 「より神のもの、兄弟のもの、若者のものとなる」

4 特集・**宣教師たち** ～想いは国境を越えて～

6 日本にやってきた宣教師 ● 「日本の土になりたい」～日本に来た最初のサレジオ会員～ ヴィンチェンツォ・チマッティ神父

「心はなんのため？」～日本の人に「心」を説いて60年～ カルメロ・シモンチェリ神父

8 インタビュー 海外で働く日本人宣教師 ●

小下和代 シスター イエスのカリタス修道女会 in ブラジル

倉橋輝信 神父 サレジオ会 in ボリビア

竹山敏枝 シスター サレジアン・シスターズ in ボリビア

【コラム】海外派遣を体験! サレジオ家族の海外ボランティア

10 Essay ● 「ドン・ボスコの宣教師団派遣」

12 ドン・ボスコゆかりの地を巡る ● アルゼンチン サンカルロス扶助者聖マリア大聖堂

14 インタビュー ● **ドン・ボスコの教え子たち**

黒田一敬さん from サレジオ学院高等学校

16 世界のサレジオ家族ニュース

18 サレジオ会新総長紹介 **ドン・ボスコの10番目の後継者**
新総長アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父に聞く

20 フェルナンデス総長の母 イザベルさん

21 第27回 サレジオ会総会 フォトダイアリー

22 Ciao! サレジオ家族探訪 ● **カリタス ドン・ボスコスクール**
目黒星美学園小学校

26 サレジアンが心を込めて贈るあなたへ応援メッセージ ● もっとキミに伝え隊!!

27 Book Review ● 本のひととき

28 サレジアン小伝 ● ありがとう! ピサルスキー神父
宣教師としてささげ尽くした人生

29 Info ● お知らせ **ドン・ボスコ生誕200周年記念イベントのお知らせ**

31 読者プレゼント

「ドン・ボスコの風」について —— 「ドン・ボスコの風」は、喜びを共にし、サレジオ家族の原点を見つめ、絆を深め、社会・世界に羽ばたいて、その実りを分かち合うためのコミュニケーション誌を目指しています。ドン・ボスコの精神を多くの方々と共有し、新しいつながりに広げていくきっかけとしてご活用いただければ幸いです。皆様からの情報提供とご支援をよろしくお願いいたします。



表紙の写真

溝部修司教司祭叙階50周年記念ミサに集まった会員たち。左前から、カヴァリエーレ神父、EAO担当地域顧問のクレメンテ神父、コンプリ神父、その後にパウロ神父、同日司祭叙階60周年を祝ったシモンチェリ神父、そしてスミス神父、マッサ神父。



ドン・ボスコとは?

「青少年の友」と呼ばれ、見立てられた若者たちのために生涯を献げた神父。1815年イタリア生まれ、名前はヨハネ（イタリア語でジョヴァンニ。ドン・ボスコは「ボスコ神父」の意味）。青少年教育に献身するサレジオ会を創立。1888年帰天。

サレジオ家族とは?

ドン・ボスコの精神を受け継ぐ修道者・信徒・協力者たち。世界130以上の国で、30団体、40万人以上のメンバーが、学校、教会、社会生活のさまざまな場面で青少年や貧しい人びとのために奉仕している。サレジオンファミリーとも呼ばれる。

「ミッシヨン」とは宣教や使命を意味する。宣教することとを使命と感じて、今日も世界のすみずみで宣教師が働いている。宣教師は祖国を離れて、人びとに何を伝えようとしているのだろうか？

取材・文・写真 ● 編集部

特集

宣教師たち

～想いは国境を越えて～



宣教師とは

ある特定の思想や宗教（ここではキリスト教）を伝えるために、自分の属する共同体（国など）を離れて活動する人のこと。イエス・キリストから特別に選ばれた十二弟子のことを使徒と呼びますが、これはギリシア語で ἀποστολος（アポストロス）、本来の意味は「遣わされた者」で、これにラテン語で、同じ意味を持つ「missio」の語が充てられました。英語の mission（宣教、使命、missionary（宣教師）の語源です。



最初の「宣教師」12使徒
レオナルド・ダ・ヴィンチ

「宣教」の始まりは？

うれしいことを体験した人は、それを誰かに伝えたくくなります。イエスの弟子たちにとつて、イエスという人物に接し、またその受難と死、復活を体験したことは、神の愛の体験、つまり神がこんなにも私たちを愛しているのかという喜びの体験でした。弟子たちは、その喜びを多くの人と分かち合いたい、まだこの喜びを知らない多くの人に知らせたいという使命（「ミッシヨン」）を感じていきます。そして同時に、これはイエスの

望みでもありました。「全世界に行つて、すべての造られたものに福音（よい知らせ）神の国、救いの到来」を宣へ伝えなさい」（マルコ16:15）。こうしてイエスの弟子たちは、世界各地に向かって出発し、宣教を開始しました。



ローマに宣教した聖ペトロ
ピーター・パウル・ルーベンス

異邦人の使徒、聖パウロ

ユダヤ教から生まれたキリスト教が世界に伝わっていくきっかけを作ったのは使徒パウロでした。最初、



執筆中の聖パウロ
バレンティン・デ・ブローニウ

彼はキリスト者を迫害する者でしたが、神からの特別な招きにより回心し、「行け、わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ」（使徒言行録22:21）という神の声を聴きます。こうしてパウロは異邦人の使徒となり、迫害を受けながらも小アジア、マケドニアなどに宣教し、最後はローマで殉教しました。「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」（コロ16とパウロは書き残しています）。

東洋の使徒、

聖フランシスコ・ザビエル

日本人が一番よく知っている宣教師はフランシスコ・ザビエルでしょう。インドのゴアに派遣され、そこから1549年に日本に初めてキリスト教を伝えました。2年3カ月の日本滞在中、洗礼を授けた数は700人ほどといわれています。その後、ザビエルは中国への宣教に向かい、途上の上川島で46歳で亡くなりました。

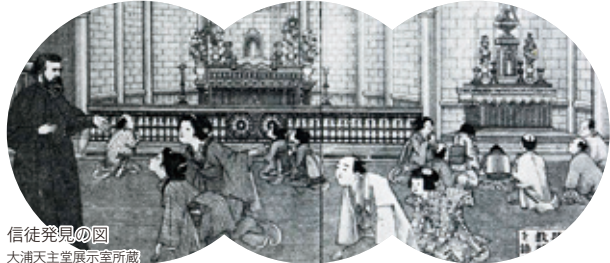


17世紀初期に書かれた
フランシスコ・ザビエルの図
神戸市立博物館所蔵

日本における宣教

フランシスコ・ザビエルの来日以降、キリスト教は急速に広まりましたが、やがて豊臣秀吉の迫害、禁教が始まります。徳川幕府もそれを引き継ぎ、宣教師たちは国外追放となり、潜伏して捕えられた者は処刑され殉教していきました。その後、約230年間、禁教下において信徒たちは自分たちだけで密かに信仰を守ります。1815年、フランスから来た宣教師による日本の信徒発見は世界を驚かせました。

明治維新による開国以降、信教の自由により外国人宣教師たちが来日し、各地に教会やミッションスクールが建てられ、日本におけるキリスト教再宣教が始まりました。



信徒発見の図
大浦天主堂展示室所蔵

私たち一人ひとりも宣教師？

宣教された人は、今度は宣教師になっていきます。愛された人は愛する人に、喜びを与えられた人は、喜びを与えていく人になっていくのです。喜びの知らせはこうして世界のすみずみに伝播していきました。宣教地であった日本からも、宣教師として海外に派遣されていく人が出てきました。しかし、海外に行く神父や修道者だけが宣教師ではありません。神から呼ばれてこの世に「生」を受けている私たちが、この命の喜びを感じ、周囲の人たちとそれを分かち合い、愛する者となっていくとき、広い意味で私たちはすでに宣教師なのです。

迫害にもめげず

キリスト教が説く唯一絶対の神への信仰、神の前における人間平等の思想などは、絶対的支配体制を築こうとする為政者や既存の宗教者から危険視されていきます。多くの国々で宣教師たちは迫害の憂き目に遭います。しかし、こうした迫害にも耐えながら、宣教師たちは地道に福音を伝え続けました。そして、その実りとして世界のさまざまなところで教会が誕生していきました。



元和キリシタン殉教の図
高輪教会所蔵

“その喜びをあなたが出会う”

すべての人と分かち合いなさい”

マザー・テレサの言葉（『祈りへの旅立ち』ドン・ボス社より）



あこが 宣教への憧れ

私は13人兄弟の10番目として、イタリア北部の村で生まれました。家族は、すべてにおいて教会が中心でした。身近に宣教師が数人いたので、宣教への憧れが強かったことを覚えています。12歳でトリノ近郊のサレジオ会志願院に入り、サレジオ会的な教育の中で喜びを分かち合っていました。勉強も真面目にしましたが、無理強いされることはありませんでした。家庭的で喜びあふれる生活でしたが、私は宣教地への願書を出しました。哲学の勉強中に自ら希望して大学の教育学科へ編入、教員資格を得る頃に突然サレジオ会本部から一通の手紙が届きました。「宣教地への願書が受理されました。日本に行くことになったので、早急に準備を下さい。」

日本への旅立ち

1949年11月13日ジェノヴァ港から出発し、海にも慣れて気持ちよく船の生活を送りました。一時帰国していた宣教師の神父も数人いて、一番若い神学生だった私は人気者になり、寂しさは感じませんでした。船が1週間、香港に留まった時には現地のサレジオ神学院の中国人神学生に様々な場所に連れて行ってもらったのが楽しい思い出です。

1950年の元旦の朝、目覚めたら三重県四日市の港に着いていました。横浜に着いたのはその6日後。やっと自分の新しい国にた

心はなんのため？

～日本の人に「心」を説いて60年～

サレジオ会

カルメロ・シモンチェリ神父

どり着いたと安心しました。着任先は、東京にある家庭のような雰囲気の小さな調布神学校で、チマッティ神父様が優しく素晴らしいお父さんでした。すでに管区長の任を終え、静かな生活を送っていましたが、私の気持ちを理解してくださり、大きな愛情の中で私を包んでくださったように思います。

日本での日々

1950年の終わり、戦時中は日本に入れなかった神学生が世界各地から来日し、神学校は日本の若者も増え、チマッティ神父様を中心に、皆で喜びのうちに過ごしていました。自給自足のため広い土地を開墾し、家畜を飼い生活していました。当時、神学校は社会との接触がほとんどなく、ただ勉強に励んでサレジオ会的養成を進めるといった閉鎖的なものでした。しかし、私と数人の神学生で子どもたちとのふれあいの場を作りたいと、休日に町に出て子どもたちを探していました。子どもたちは手を差し出し、「チョコレートをちょうだい」とか「ガムをちょうだい」という雰囲気でしたが、「今度、サレジオに見に来なさい」と誘っていました。

司祭としての日々

1954年に碑文谷教会で叙階されてすぐは調布神学院で働きましたが、その後は数年ごとにいくつかの小教区で働き、たくさんのすばらしい体験をしました。

東京・小平のサレジオ学園ではドン・ボスコの教育は“心の教育”であることを皆にわかってもらえたことが大きな慰めでしたし、多くの子どもや家族と接するうち、日本の社会に表と裏があることも気づかされました。初めて教会の主任司祭を任された時、1人で働くこ

との寂しさを感じましたが、次第に慣れ、信者の方々と接するうちに、これが宣教師の理想の仕事、自分に合った仕事であるとわかりました。また、教会にとって音楽はとても重要な要素ですから、よい音楽を広めるためチャリティーコンサートを開いたりもしていました。

幼稚園の園長をしていた時は、ドン・ボスコが望んだ“心”を中心とした教育、使命感、信仰の雰囲気を先生方と一緒に作る努力をしました。

12年前から移り住んだここ大分の別府教会は、別府市の観光名所に指定され、多くの人が訪れます。チャンスがあると“心”の話をし、キリスト教を紹介すると、ほとんどの人は喜んでくれ、時には感動して「これからもっと心を活かして、人のために尽くしたい」という人もいます。独自の表現ですが、“心の商売”“心の宣伝”ができるのは大きな喜びであり、宣教師としてやりがいを感じています。この商売が繁盛すれば、世界が一つになって本物の喜びを分かち合えるのです。

現在はサレジオハウス責任者として年配・病気のサレジオ会員と共に生活し、世話をしています。何人かの会員を天国へ見送りました。いくつかの修道女会の聴罪司祭と司牧もしています。こうして、神の愛、神のご計画の実現に協力し応えていくことがいかにすばらしいかを、以前よりもはっきりと感じています。神に感謝、皆に感謝、すべてのために。

カルメロ・シモンチェリ
SIMONCELLI Carmelo

1927年7月1日イタリア・トレント県ロベレート市リッツァーナ生まれ。1950年に宣教師として日本に渡り、チマッティ神父と共に働く。1954年に日本で司祭叙階。調布神学院、大阪支部院長、小平サレジオ学園、下井草教会、三河島教会、鷺沼教会などの小教区で司牧。現在別府サレジオハウス責任者。87歳。

Missionaries in Japan

日本にやって来た宣教師

1926年、9人のサレジオ会員が初来日した。

日本での事業の基礎を築いてきた先人たちの中から、2人の宣教師の生き方と想いを紹介したい。

文・写真 ● 編集部

日本の土になりたい

～日本に来た最初のサレジオ会員～

サレジオ会

ヴィンチェンツォ・チマッティ神父

ドン・ボスコとの出会い

1926年2月8日、9人のサレジオ会員が現在の福岡県・門司港に上陸しました。その目的は宮崎・大分両県の宣教地をパリ外国宣教会から受け継ぐこと。団長がヴィンチェンツォ・チマッティ神父でした。

1879年、イタリア中部ファエンツァ郊外の貧しくも温かい家庭に生まれた彼は、信仰篤い両親に育てられ、2歳の時にドン・ボスコに出会います。彼の母親は幼い息子にドン・ボスコを一目見せようとわが子を高く差し上げてこっぴどい叱咤します。「ヴィンチェンツォ、ドン・ボスコをごらん」。この言葉は彼の心に深く刻まれました。

幼少期にはサレジオ会のオラトリオ（教会学校）に兄ルイジと共に通っていました。9歳になると兄の後を追ってサレジオ会の学校の寮で7年を過ごします。背は小さかったのですが、成績優秀、足も速く、演劇、聖歌隊でも皆の注目を浴びるほどでした。それでも少しも浮かれる素振りを見せなかったそうです。ある時、南米から帰国した宣教師の話を聞き、いつかは遠く貧しい宣教地に行きたいと考えられるようになりました。ドン・ボスコの精神を学び、善良さと勤勉さをもち合わせたヴィンチェンツォ少年は、導かれるように17歳の時、生涯を神に捧げる誓いを立て、サレジオ会へ入会しました。

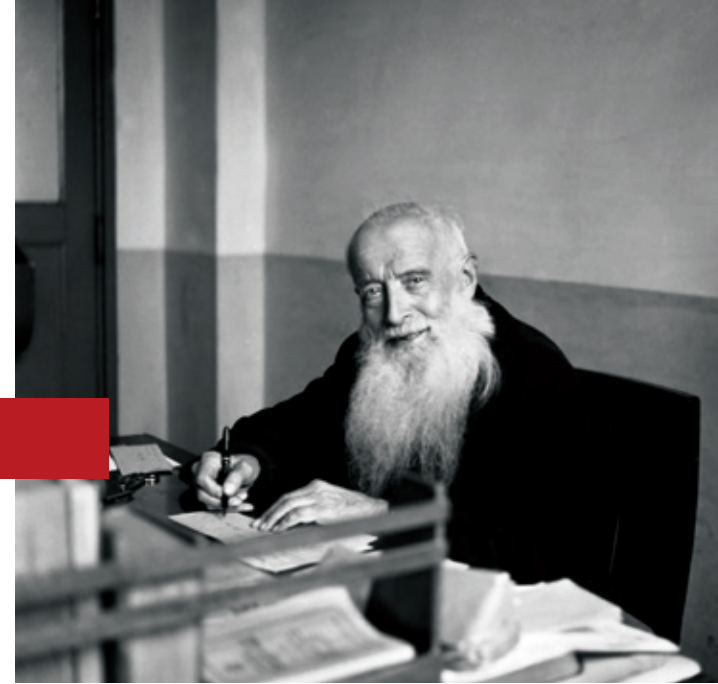
多才な司祭

サレジオ会員となった彼は、トリノの名門ヴァルサリチェ学院の高等学校を卒業。実地課程ではヴァルサリチェ学院で教師をしながら、国立トリノ大学で自然科学の博士号、哲学・教育の博士号、国立パルマ音楽大学院で「コーラスのマエストロ」のディプロマ（免許状）を取得。神学の勉強も怠らず、1905年25歳で司祭に叙階されました。その後46歳までヴァルサリチェ学院で校長も務め、忙しい日々を過ごしたのです。

宣教への熱い思い

イタリアでの充実した環境の中でも、宣教への熱意は消えていませんでした。当時のサレジオ会総長、リナルディ神父へ宛てた手紙でこう語っています。「…私が赴く宣教地として、より貧しく、より苦勞の多い、より見捨てられた場所を見つけてください。どうも居心地のよい場所は私には合わないのです。どうか、今度こそ、願いをお聞き入れください。」

手紙が送られた同じ頃、ローマ教皇からの命を受けたサレジオ会は、宣教師派遣50周年記念事業として日本へ宣教師を派遣することを決定。1925年12月29日、チマッティ神父を団長とする宣教師団はフルダ号に乗り、イタリア・ジェノヴァ港から日本へ向け出発したのです。46歳の時です。



日本の土になりたい

チマッティ神父が宣教において苦勞したのは日本語でした。それに加え戦前・戦中・戦後のとても困難な時代に慣れない土地での苦勞は計り知れません。彼は他の宣教師たち、日本で育てた教え子たちとともに、日本の人びと、特に青少年のために出版をし、学校を建て、様々な事業に心血を注ぎました。病床で「日本の土になりたい」と語ったほどすべてを日本にささげたのです。その働きは今も、彼の精神を受け継いだ日本のサレジオ家族によって継続しています。

チマッティ神父は教会から「尊者」とされ「日本のドン・ボスコ」と呼ばれています。彼は私たちにドン・ボスコの精神を遺産として残しました。今でも私たちに「ドン・ボスコをご覧ください」と言ってみ守っているのです。

ヴィンチェンツォ・チマッティ
CIMATTI Vincenzo

サレジオ会司祭。1879年7月15日イタリア・ファエンツァ生まれ。1926年にサレジオ会として初来日し、多くの日本人司祭・修道者を育成。音楽家としても900曲以上も作曲している。1965年10月6日、86歳で帰天。

【参考文献】
『チマッティ神父―本人が書かなかった自叙伝 上下巻』ガエタノ・コンプリ編訳
『チマッティ神父の生涯 上下巻』A・クレバコーレ著
『ほほえみ、慈愛と祈りの人 チマッティ神父』A・クレバコーレ著

海外派遣を体験！ サレジオ家族の海外ボランティア

教育と開発を目指す女子国際ボランティア **VIDES**



世界中のサレジオン・シスターズのボランティア活動を統合し、1991年に発足した国際組織で、世界26カ国で活動。日本加入は1994年10月。「できることから、気負わず、無理せず、できることだけを行う」がモットー。VIDES 東京では14の活動がある（海外ボランティア、学資支援、リストラテ、フレンドシップ等）。いつでも、だれでも入会できる。詳細は公式ホームページ <http://www.videsjp.org/> にて。

ドン・ボスコ海外青年ボランティアグループ **DBVG**



1991年に東京・調布のサレジオ神学院で行われていた活動の中から青年たちの発案により、サレジオ会日本管区を母体として発足。「社会貢献」と「青年たちの育成」を柱にフィリピンやバブアニューギニア、ソロモン諸島などのサレジオ会関連施設に3週間滞在し、ボランティア活動することを目的としている。この活動の中で参加者が出会いや交流、体験を通して人間的な成長を促すと共に、他者へ開かれることを志している。参加資格は18歳以上、自ら派遣参加を希望する男女。詳細は公式ホームページ <http://www.donboscojp.org/sdbdbvg/> にて（2014年度の募集は終了）。

in ボリビア



喜びの日々！ ボリビアの土になりたい

サレジオ会

倉橋 輝信 神父

ローマで勉強していたとき、スペイン人のサレジオ会員で、ボリビアで宣教している神父がいました。彼が「近くに日本人移住地があり、学校には50人近くの日本人二世がいる。勤勉で真面目ですばらしい。日本人司祭が1人いたら助かる」と。ちょうど総会でローマに来ていた故本田管区長に彼を紹介しました。数日後、本田神父から、「命令ではないが、もし行きたければ願書を出しなさい」と。

当時新総長になったヴィガノ神父が「ある管区は一人も宣教師を送ってない」と話されたのを聞いて、行ってみようと思いました。私は40歳で、これからスペイン語など学ぶのはきついな思いましたが、本田神父は「あちらでは日本人のために働くんだった。スペイン語の勉強は必要ない」と。実際は行ったらほとんどスペイン語でしたが（笑）。ボリビア・サンタクルスに派遣され、ずっと喜びの日々でした。大部分が信者ですからすべきことはたくさんあります。今では日系人のためよりボリビア人のための仕事が多くなりました。仕事をするのは感謝されるためではないけれど、たくさんの人から感謝をされます。ボリビア人は友情を大切に、感謝の気持ちを率直に表す国民です。来てよかった。必要とされていると感じます。ボリビアで骨を埋めるつもり。日本は何十人というサレジオ会の外国人の宣教師が日本の土になっている。日本から1人ぐらい外国の土にならないれば恥ずかしい。それこそ日本人サレジオ会員の意地として（笑）。

くらはし てるのぶ

神奈川県・横浜市出身、77歳。1980年よりボリビア・サンタクルスへ渡り、今年で34年目。



取材 ● 編集部

特集

インタビュー

海外で働く日本人宣教師

キリスト教の教え・愛を分かち合うために、日本から海外に渡った宣教師たちがいる。その体験や思いを語っていただいた。



in ボリビア

一番左が竹山シスター

最も貧しい 青少年たちの中で

サレジオン・シスターズ

竹山 敏枝 シスター

たけやま としえ

長崎県長崎市出身。1964年初誓願宣立。今年が誓願50周年（金祝）にあたり、一時帰国予定。



事務や栄養士として勤務していた児童養護施設を停年退職する年齢に至った7年前、再挑戦したいという欲求を抑えることができず、もがいていました。正直言うとなんか力を出し切っていないという欲求不満があったのだと思います。幸いに当時の長上の寛大な理解を得て、とりえず異文化体験という名目で海外に出る選択をしてボリビアにやってきました。始めは燃える宣教熱意に動かされて出てきたわけではありませんでした。しかし現在では、抑えられなかった再挑戦への欲求が、少しずつ確かな宣教熱意へと変えられていくのを感じています。

日々の活動は、文字どおり最も貧しい青少年（身寄りのない青少年のための施設）の中で、将来の自立の一助になることを希望しつつ、手芸などの技術を教えています。日本の中学・高等学校で家庭科の授業をしていたことが大いに生かされています。こちらでは給料や措置費が支給されないで監査の苦勞がなくありがたいです。

従順の下にですが、やりたいことが思いっきりやれるということは神から授かった力を完璧に生かしきっているという喜びを感じます。「忠実なしもべよ…」と主にほめられたいですね。強いて苦勞があるというならば、言葉の不自由さのために、誤解や人間関係のトラブルに耐えなければならないということです。



in ブラジル

日本の歌手、中平マリ子氏とその母上。日系老人ホーム「慈の園」訪問

南米ブラジルで受けた 思いやりの心

イエスのカリタス修道女会

小下 和代 シスター

こした かずよ

長崎県・佐世保市出身。姉と叔母もイエスのカリタス会シスター。



1975年にブラジル・サンパウロに渡って来年で40年。あっという間でした。きっかけは33歳のとき、長上から海外に宣教師として行ってみませんかと声を掛けられたこと。自分の望みというより修道者としての従順で行きました。当時、カリタス会はずでにブラジルに入っていて、先に宣教師として出発したシスターたちを見送ったことがありましたが、まさか自分が行くとは思っていませんでした。それからずっと日系人入植地で日本語学校や日本語教育の幼稚園、老人ホームなどで働いてきました。現在、日系移民一世が減り、日本語を話す人は少なくなりましたが、二世や三世の日本人としてのアイデンティティの面でこれからもサポートが必要だと思います。司牧した人々の中からシスターが育ち、ブラジルのカリタス会には現在日系二世のシスターが16名います。ブラジル人の子どもたちのために今彼女たちが第一線でバリバリ頑張っています。

日本の若者たちには国際的な感覚を身につけてほしいですね。海外に出るのもいいですが、日本にいる外国人に対する思いやりを持つことも大切だと思います。ブラジルはカトリックの国ですからキリスト教精神があって人間愛が温かいです。私はブラジルで現地の人から温かくしてもらいました。日本の若者たちが、外国人たちに温かく接してほしいです。だからこそ国際的な感覚の第一歩だと思います。

「ドン・ボスコが最初の宣教師に与えた 20 の勧め」より

5、特に病人、子ども、老人、貧しい人びとの世話をしなさい。そうすれば、神の祝福と人びとの好意を手に入れられるでしょう。

12、あなた方が衣食住において貧しいことを世の中に知ってもらいなさい。そうすれば、神のみ前では豊かで、人びとの好意を受けることになるでしょう。

13、互いに愛し合い、助言し合い、過ちは矯正し合いなさい。けれども、嫉妬や恨みは抱き合わないよう。むしろ一人の善が皆の善になるように。一人の痛みや苦しみが皆にとっても痛みや苦しみとみなされるように。そして一人ひとりがその苦悩を遠ざけるか少なくとも和らげるよう努力しなさい。



「宣教師に与えた 20 の勧め」
ドン・ボスコ直筆のメモ



1875 年第 1 回宣教師団派遣。前列左端がカリエロ神父、その右がドン・ボスコ



1886 年ドン・ボスコの「宣教の 5 番目の夢」。チリ・サンティアゴから北京まで宣教師を送るという夢を見た

Essay

「ドン・ボスコの宣教師団派遣」

文 ● 浦田慎二郎

1875 年 11 月、ドン・ボスコが 60 歳のとき、初めての宣教師団を海外（アルゼンチン）に派遣する。前年にはついにサレジオ会の会憲会則が承認され、まさに世界に羽ばたこうとする修道会を象徴する出来事であったと言える。この宣教師派遣という一大イベントはその数年のうちに急に思いついた話ではなかった。ドン・ボスコの中では、長い間少しずつ温められてきた気持ちであり、アイデアだったのだ。

宣教へのあこがれ

ドン・ボスコは 1841 年 6 月に司祭になった後、すぐに司牧の現場に出るのではなく、司祭研修学院で 3 年間研鑽（けんさん）を積んでいた。実は研修学院での勉強が終わるころ、ドン・ボスコはある修道会に入り、宣教師になることを真剣に考えていたのである。理由はいくつかあるが、研修学院の創設者の一人であるランテリ神父が創立した Oblati di Maria Vergine という会があり、ベルマ（現在のミヤマー）に宣教師を送っていた（1842 年に使徒座代理区が設立された）。ドン・ボスコは当然この会のメンバーたちと知り合いになつており、学院時代に大きな影響を受けたと考えられる。

結局カファツソ神父（ドン・ボスコの霊

1871 年の宣教の夢

そんな中、ドン・ボスコは夢を見る。話を要約するとういうことになる。

ドン・ボスコはまったく未知の土地にいる。広大な平野で、地平線のはるか彼方に岩山が見える。そこに多くの人々が行き来しており、彼らは巨大でいかめしい顔で、ほとんど裸だった。すると平野の果てから宣教師たちが現れるのだが、皆殺されてしまう。そのとき、若者たちに先導された宣教師団が登場する。よく目を凝らして見ると、それはサレジオ会員たちで、知った顔であった。ドン・ボスコは彼らのことを心配するのだが、人々は今度は陽気な雰囲気であ彼らを迎え、武器をおろす。宣教師たちは彼らに教育を与え、福音を伝えていくのだ。

ドン・ボスコは、最初この夢がどこを指しているのかわからず、自分の見たイメージと情報を一致させるように努めるのだが、なかなか見つからない。そしてついに 1874 年、プエフスアイレスの大司教から宣教師を送ることを依頼されたとき、ドン・ボスコは南アメリカの地理に関する本を読み、驚く。それはまさに、あの夢で見た地域、人々のことだったのだ。南アメリカの南部に広がるパタゴニアこそがその場所だったのだ。

的指導者」の導きによつてドン・ボスコはその考えをあきらめるのだが、宣教への熱意は彼の中で消えることはなかった。宣教に関する記録や本を読み、1848 年には宣教師たちを派遣する話をしていたというのである。食事の読書としてこれらの本が読まれたとき、ドン・ボスコはオラトリオの少年の一人ベツリアにこう言ったと言われている。「ああ。もしもつと司祭や神学生がいるならば！ 私は彼らをパタゴニア（現在のアルゼンチンチリの南に広がる地域）やティエラ・デル・フエゴ（南アメリカ南端の諸島）に福音を伝えるために送るだろう！ ベツリア、なぜその場所かわかるかい？」「多分そこが最も必要とされているところだからですか？」「その通り！ 彼らは最も見捨てられた人たちのだ！」

その後もドン・ボスコは宣教を進めていた人たちと関わり続けていた。そして 1862 年に日本 26 殉教者が列聖され、1867 年に日本 205 殉教者が列福されたとき、オラトリオでは宣教師へのあこがれの機運がさらに高まっていた。

このときまでには、ドン・ボスコの中では宣教師を派遣することは、彼の個人的な興味や傾倒というよりは、サレジオ会として果たすべき使命と考え始められていた。

1875 年 1 月 29 日（当時フランス・サレジオの祝日）、ドン・ボスコは学生たちと会員を集め、サレジオ会員は多く宣教のために南アメリカに出発するだろうと発表する。反応は爆発的だった。だれもが宣教師になる熱意に燃え、そのために司祭になろうという人もまた大きく増加した。

ドン・ボスコは山のような希望者の中から最も優秀な人物たちを選ぶ。団長となったのは、37 歳のカリエロ神父。イタリアのサレジオ会にとつて、彼らを宣教地に送るのは大きな痛手でもあったが、ドン・ボスコはあえて彼らを派遣することになる。11 月 11 日に扶助者聖マリア大聖堂で荘厳な派遣式が行われた。それは非常に感動的な場面であったという。サレジオ会にとつて、まさに新しい歴史の始まりであった。



浦田慎二郎 うらた しんじろう

サレジオ会司祭。サレジオ学院卒。教皇庁立サレジオ大学大学院霊性神学博士課程修了、神学博士号取得。ドン・ボスコの研究者。現在サイテック館長。



★アルゼンチン ブエノスアイレス アルマグロ区★

文・ガエタノ・コンプリ Gaetano Compri
サレジオ会司祭 チマッティ資料館館長

アルゼンチン — サレジオ会最初の宣教地 — サンカルロス 扶助者聖マリア大聖堂

宣教師への憧れ

神学生時代、ドン・ボスコは宣教師からの報告をよく読んで、宣教師になろうと思っていた。教えずたちにはしばしば宣教師たちの話を聞かせ、サレジオ会の中に宣教師の理想を育て、いつか宣教師を派遣したいと考えていた。1874年、サヴォーナ駐在のアルゼンチン領事ガンツォロが、ブエノスアイレスの大司教にサレジオ会員の話を話した。すると大司教はサレジオ会員のアルゼンチン移住を依頼した。それを受けてドン・ボスコは書き残している。

「南アメリカの地理に関する本を取りそえて丹念に読んだ。驚いたことに、本に載っている版画のどれもこれも、私が夢で見た人びとや地域を完璧に描写していたのだ。アルゼンチンの南部に広がるパタゴニアがその場所であった」（完訳ドン・ボスコ「伝」より）。そして派遣を決意する。

南米での宣教

1875年11月11日、トリノの扶助者聖マリア大聖堂で第1回サレジオ会宣教団派遣式が行われた。团长はジョヴァンニ・カリエロ神父。彼は後に枢機卿になった。ドン・ボスコは次のように述べた。「これは大事業の始まりです。わずか数日で全宇宙を改宗させるわけではありませんが、今日のこの出発は小さな種であり、次第に大きな木に成長し、枝を広げ、豊かな実りをもたらすでしょう」。

第1回宣教団一行は1875年12月14日、アルゼンチンのブエノスアイレスに到着した。そこに待っていたのは、司牧者を必要としていた3万人のイタリア人移民だった。カリエロ神父は小教区の司牧のために残り、ファニャーノ神父は男子寄宿学校運営のためにサンニコラスに移った。



奥行き67m、幅27m、丸天井の高さは45mあり、聖堂奥2階の扶助者聖マリア像は高さ5mの位置にある。地下、中階、上階にそれぞれ聖堂があり、地下聖堂には16の祭壇がある。教皇フランシスコはブエノスアイレス在住の頃、このマリア像下でよく祈っていた



サンカルロス扶助者聖マリア大聖堂の正面。み心のイエスのご像が正面玄関で迎えてくれる

た。カリエロ神父は3つの事業を計画し、その1つが職業訓練校であった。1876年、現在のタクアリと聖ヨハネ大通りの角に学校「アルテス・イ・オフィシオス（芸術と職業学校）」を建て、2年間活動していたが、サンカルロス小教区運営をサレジオ会に委託される際、少し離れた所に移された。その学校が現在のアルマグロ区にあるピオ9世学校の土台となった。アルマグロ区の人口増加に伴い、1910年にサンカルロス扶助者聖マリア大聖堂が建てられた時、ほとんどの彫刻をこの学校が作成している。こうしてサレジオ会員たちはブエノスアイレスを拠点としてドン・ボスコの夢を実現していく。

アルマグロ区の大聖堂

ブエノスアイレスの中心地に建つこの大聖堂は1895年からアルゼンチン管区長を務めたヨセフ・ヴェスピニャーニ神父により「19世の終わりと20世紀の始まりの記念」として

計画された。彼の弟であるエルネスト・ヴェスピニャーニ神父を建設の担当者として呼び、1900年から10年の歳月をかけて建設された。現教皇フランシスコはブエノスアイレス大司教だった間、必ず5月24日のミサと行列の司式のために来ていたと、当時の主任司祭が語っている。教皇が77年前この大聖堂で洗礼を受けたことが知れ渡り、世界中から巡礼者が増えている。

未開地パタゴニア、そして世界へ

1878年ブエノスアイレスの大司教は、コスタマーニヤ神父とラバリアーティ神父、大司教代理をパタゴニアの調査旅行に派遣した。道中記を書いた手紙は、サレジオ会報に掲載され、多くの人びとが冒険譚を楽しみにしていたという。それから135年後の2013年、サレジオ会は144回目の宣教師派遣式を行った。現在、その事業は世界133の国と地域に広がっている。



ウスアイアの風景。世界の最南端にあるサレジオ会の教会と学校



1875年に設立されたアメリカで一番最初のサレジオ会支部、サンニコラス学校



アルゼンチンの南端にあるリオ・グランデのサレジオ会の農業学校

DBの

★ 教え子たち ★

今やメディアの発達で世界中で起る紛争のニュースが絶えない。そんな危険と隣り合わせの紛争地域で平和維持のため、現地の人びとと共に「サレジオ魂」で理想の社会を築く支援をする、（独）国際協力機構JICA専門家の黒田一敬さんに話を聞いた。

★ ★ ★

黒田さんは、
今年のNHK大河ドラマ
「軍師官兵衛」の黒田官兵衛との
つながりがあるそつですが…

キリシタン大名だった黒田官兵衛の息子が長政で、その弟となるのが

編1265）とあるとおりです。

波瀾万丈の中でも、挫折があつても、自分はいつか役に立つという使命感だと思っています。

黒田さんの仕事を
教えてください

紛争後の各地で国連の平和維持活動に従事してきました。1992年からこれまで14の国や地域に派遣されました。カンボジア、南アフリカ、モザンビーク、タンザニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、インドネ



カヌーにバイクを載せ大河を渡り6時間の奥地にて、紛争後の将来について語る。真実和解委員会、国連モザンビーク活動 ONUMOZ 1994

仕事において
大切にしていることは？

「それでも人生は素晴らしい、理想に燃えることは素晴らしい」と他者に夢を与え続けることを使命と思っています。これは宣教師に育てられた証です。モットーは「大切なことは目に見えないんだ」というサン・テグジュベリの言葉です。

1999年東ティモールの独立を問う住民投票で、私が立ち会っていた投票所は民兵の襲撃を受け、投石と銃弾を浴びました。逃げ遅れた投票所係員をかばって、私は机の下に押し込み、飛んで上にかぶさっていました。私は腕に怪我をしまし

サレジオでの思い出は？

必死で走ったマラソン大会や野尻湖での肝試しなど、ほろ苦い青春の思い出がいっぱいです。サレジオ祭（文

化祭）ではコンプリ校長の聖骸布展示発表にも励みました。そのとき後輩に、鳥越君（現サレジオ学院校長）もいました。ドン・ボスコの家のロザリオの静謐さ、神父方の御馳走してくれる本物のパスタ、チーズはたいへん魅力でした。結構無茶なこともしていました。学校近くでスケートボード階段7段跳びに挑戦して足の骨を折ったり（笑）。勉強に関しては要領が悪く、勉強してもまったく試験の点に結びつかない生徒でし

たが何とかティモール人を守ることが出来ました。自分がどうなっても、まず人を助けることに迷いは全くありませんでした。とっさの判断にサレジオ魂が出たと思います。

防弾車で行き来していたパレスチナと打って変わって、カイロでは地下鉄で通勤しています。混雑した地下鉄の中で人々の顔を見ていると、民主主義とは何か、どうしたら良い選挙ができるのかなど、ひらめきと発想を生む貴重な時間となつてい

ます。現地の人とひざを突き合わせながら本当に必要な支援は何か考えていくという私のアプローチは、ドン・ボスコの教えの実践だと思っていますし、人々と痛みを共にして支援に従事するというこの仕事は、神様から与えられた使命だと思っています。

この仕事において嬉しいことのひとつは、世界のあちこちでサレジオ会員と出会えることです。平和維持活動、民主化支援、人道支援という現場でも、国連より先に入っているのがカトリック修道会であり、サレジオ会もその一つです。彼らの存在にはいつも大いに励まされます。★



「サレジオ出身の偉む父、筋金入りのカトリック家庭出身のラテン母、海外で生まれ育つ子女三人。ドン・ボスコの教え子として海外生活22年、イスラム社会にて10年。家族は現地社会との深い接点を生きています。長男の初聖体はイスラエルのヤッフォにて。北川夫介神父がエルサレムから駆けつけてくださいました。」（本人談）

No. 15 黒田 一敬 さん

（独）国際協力機構JICA専門家

★サレジオ歴★ サレジオ学院高等学校（旧サレジオ高等学校）

（バツレハム、ロスバロス、デイリ、四谷など各地で多くの恩師や同窓生との再会に恵まれ、サレジオ歴は卒業後に深まっている。）

プロフィール

1960年生まれ。民間企業を経て1992年より国連カンボジア暫定行政機構で活動。国連職員として派遣された東ティモールで、投票所にて襲撃に遭い腕を負傷。第3回中田厚仁基金褒賞受賞。現在、エジプトの民主化支援に従事。メキシコ生まれ南米育ちの熱血日本人の妻、東ティモール生まれの長男、サマリア地方生まれの長女と共にエジプトアラブ共和国カイロ在住。

「それでも人生は素晴らしい、理想に燃えることは素晴らしい」

"Le plus important est invisible"
— 大切なものは、目に見えない
Saint-Exupéry サン＝テグジュペリ



サレジオ学院中学校・高等学校

神奈川県横浜市都筑区南山田 3-34-1

www.salesio-gakuin.ed.jp



人々の希望が詰まった投票箱を積んだヘリ。民兵の攻撃を受けながらも離陸した瞬間。独立を問う住民投票。国連東ティモール支援団 UNAMET 1999

※黒田一成

くろだ・かずしげ



黒田二十四騎の一人。三奈木黒田家の初代。織田信長に反抗した荒木村重の説得に有岡城へ向かった黒田官兵衛が捕えられ牢獄に入れられた際、父の重徳が色々と世話をし、後に官兵衛はその恩に報いるため、一成を養子として迎えている。その後の武功により、三奈木黒田家は幕末まで大老家を務めた。



ナイジェリア

大きな可能性を秘めた ナイジェリアのサレジオ会

「多くの問題と暴力に苦しみながらも、深い変化をとげつつあり、将来に大きな可能性を秘めた」巨人、1億1千万人の25歳以下の人口を擁する希望の国」。今年5月に入り、サレジオ会西アフリカ英語圏管区のシルヴィオ・ロツジャ神父とバオロ・ヴァスケット修道士は、ナイジェリアをこのように評した。

この国のテロの原因は、国外からのイスラム原理主義、豊富な石油資源の恩恵が国民に還元されない



ブラガ神父。宣教地、中国で現地の子どもたちと共に

パンフレットも配られた。

ブラガ神父の教え子、ソロモン諸島ギゾのルチアノ・カベツリ司教がティラノの教会でミサをささげ、カメローニ神父は説教で、試練の多かったブラガ神父の子ども時代、家庭の価値の擁護と促進のために働いたこと、中国とフィリピンでドン・ボスコの予防教育法を特に慈愛と霊的父性をもって生きたことを紹介した。ブラガ師は、少年時代に2代目総長ルア神父に出会い、中国では殉教した聖フェルシリアの傍らで生活した時期もある。

イタリア

「君にとってマリアは？」 フェルナンデス総長、 若者たちに問う

5月24日の扶助者聖マリアの祝日、トリノの町とドン・ボスコの子らは一つになる。今年はサレジオ

こと、政治的権力抗争など。現在、北部でテロが頻発し、多くのキリスト教徒が避難民になっている。国の中央と南部で活動するサレジオ会は直接被害を受けていないが、学校教育と信仰教育を続けることが暴力への自分たちの答えだとシルヴィオ神父は言う。「ボコ・ハラムは教育に『ノー』と言い張っています。私たちは、教育に『イエス』、特に女の子たちの教育に『イエス』と言います。」200人以上の少女たちが誘拐された事件について、「多くの人の努力にもかかわらずどうしたら解決できるのかわかりません。祈り続けましょう」とバオロ修道士は語り、この悲劇によって、サハラ以南のアフリカでは珍しくない少女たちの強制婚や家庭内暴力などの問題に光が当たること期待した。

サレジオ会はナイジェリアで、ストリートチルドレンのための活動、職業訓練校、貧しい人々の多い小



現地の若者とともにミサをささげる

会新総長フェルナンデス神父を迎え、大きな喜びに包まれた。この日を祝うため、各地から多くの巡礼者が集う。「毎年、たくさんの人が集まります。人々は経済危機や価値観の危機に苦しんでいます。助けを求める声や、いただいた恵みへの感謝の声を聴くことができます」とある巡礼者は語った。

祝いは23日の前夜祭から始まり、ロザリオや徹夜の祈りが行われた。24日の当日、トリノのノシリア大司教はミサの中で若者たちに、「社会の現状にあきらめないでください。あまりに多くの人が飢えや貧しさのために亡くなっています。富める者はさらに富を得、貧しい人々はさらに貧しくなっています。低賃金で働かされる人、失業者、不安定な雇用の人たちがいます。日々の現実に関心かけましょう。それは変化をもたらす第一歩です。」と呼びかけた。



トリノ扶助者聖マリア大聖堂前の様子

教区司牧などを行い、平和と共存のための教育こそ、ナイジェリアの大きな潜在力を活かす手段であると確信している。マドリッドのサレジオ宣教事務局は誘拐された少女たちの解放を要求し、国際的なキャンペーン #BringBackOurGirlsに参加している。

ザンビア

自分を知らぬ—— 10代のためのセミナー

麻薬や10代の妊娠出産などの問題に直面するザンビア・ルフワ村の若者たちのため、現地サレジオ会のレンツク神父は生活指導プログラムを行っている。5月5日から1週間にわたり、サレジオ会ザンビア管区青少年司牧担当ハビエル・バリエントス神父と首都ルサカのチームが主催するセミナー「人生の道を選ぶために」に120人の10代の若者が参加した。

チームスタッフのチェンベさんは、「自分を知らぬ、自分の立ち位置を知る、目標に向かって力を尽くす」というモットーを紹介し、人生の課題に積極的に取り組むように励まし、ジャフエトさんは「10代の人間関係」というテーマで話した。参加者は抱えている問題やうれしかったことを仲間と分かち合い、募集したテーマで公開フォーラムを行う

午後には、フェルナンデス神父が総長として初めて扶助者聖マリア大聖堂でミサをささげた。総長は、大聖堂を埋め尽くしたサレジオ青少年運動の若者たちに、マリアの姿を見つめるようにと語りかけた。

「ドン・ボスコの家族の一員として、私たちはマリアのことを考えずにはいられません。マリアは『すべてを行われた』から、今もそうしておられるからです！ 皆さんに尋ねます。『君にとってマリアとは誰か？ 自分にとってマリアとは誰なのか？』フェルナンデス神父はさらに、マリアの4つの顔—女性、母、先生、扶け手—について語った。

夕方からは、マリアにささげられた1週間をしめくくる伝統の聖母行列が、参加者の持つろうそくの光で通りを埋めながらトリノの町を巡った。

パラグアイ

チャコ・パラグアイ使徒座代牧区 災害支援要請

ボリビア、ブラジル国境に近いパラグアイ北部のチャコは、5月下旬、集中豪雨が何日間も降り続き、各地の道路は崩壊、さらに、人や物資の大事な輸送手段だった飛行機が故障し、住民は完全に孤立した。「私たちが孤立した状況にあるのは、行政・政治の責任の欠如の結



セミナーの様子

た。子どもの人身売買、性的虐待、麻薬・アルコール依存症など深刻な問題の話し合いでは、初めのうち口の重かった若者たちもしだいに心を開き、直面する問題をどのように乗り越えられるか語り合った。

イタリア

中国・フィリピンで活動した 宣教師カルロ・ブラガ神父

5月23日、イタリア・ティラノで、神の僕カルロ・ブラガ神父（1889〜1971）の叙階100周年が祝われた。中国とフィリピンで宣教師として働いたブラガ師の列福・列聖の手続きはフィリピンのサン・フェルナンドで今年1月に始まった。サレジオ家族の列福・列聖申請者ビエルイジ・カメローニ神父がブラガ神父の取り次ぎによる恵みを紹介、列福運動に参加し祈るための

果です」と代牧区長ガブリエル・エスコバル・アヤラ司教は地元ラジコで語った。長年にわたり行政から顧みられず、見捨てられてきたと司教は強く非難する。地元政治家たちは1年のほとんどを首都で過ごし、立場を利用して私腹を肥やすことしか考えていない。同司教は「私たちもパラグアイ人」と訴えている。

チャコとサレジオ会の関わりは1896年、4人のサレジオ会員がパラグアイ川をさかのぼり、チャコの人々の中で福音を広めたときに始まった。1917年、首都アスンシオンのシンフォリアノ司教がサレジオ会に同地の宣教をゆだねて以来、サレジオ会はチャコの宣教・司牧を行っている。1948年には教皇ピオ12世によってチャコ・パラグアイ使徒座代牧区が創設され、初代のウルグアイ人サレジオ会員ムゾン司教より代々、サレジオ会員が代牧区長を務めている。



ガブリエル・エスコバル・アヤラ司教



総長就任後の教皇フランシスコへの謁見

ドン・ボスコの 10番目の後継者

新総長アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父に聞く

今年3月25日、第27回サレジオ会総会（GC27）はドン・ボスコの10番目の後継者にアンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父を選出しました。前任はアルゼンチン南管区長。昨年12月にスペインの新しい扶助者マリア管区の管区長に任命されたばかりでした。どのような人物なのでしょう、ANS（サレジオ情報庁）によるインタビューからご紹介します。



第11代総長
アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父

どのような
幼年時代でしたか？

フェルナンデス総長（以下総長）

スペイン北の海辺の漁村に育ち、素朴で穏やかな子ども時代でした。大自然と海、太陽の印象が強い場所でした。両親、祖母、おじ、おば、その他親戚たちの豊かな愛情に包まれて成長し、明朗で、穏やか、愛情深く活発で、感情豊かに育ちました。

サレジオ会への
入会のきっかけは？

総長 2点あります。まず、幸

せな家族の中で育ったということ。単純ですが本物のキリスト教的環境でした。神がそこにおり、マリアへの信心が生きてお

り、父やおじが海に出るときは神にゆだねていました。海はいっ荒れて思わぬ事故が起こるかわからなかったからです。

もう一つは、サレジオ会の学校で勉強できたからです。夏の休暇を私の村で過ごしていた老婦人がサレジオ会員の友人で私の両親の友人でもあったのですが、幼少の私のためにしてあげられる最も良いことは私がサレジオ会の学校で勉強することだと考えたのです。こうしたわけで私は村を離れて、サレジオ会員たちと出会い、彼らの私や仲間たちへの接し方、友情、自然な振る舞い、親しさ、単純さに心を奪われました。それがあつて、後に医学か科学を学ぶため大学入学の書類を書いています。サレジオ会員たちと共にしてみたいという望みが起こってきたのです。

院長、
そして管区長として、
困難はありましたか？

総長 どんな人生、役割を選ぶ

にしても、つねに困難はあります。院長としても、2度の管区長としても、その奉仕の使命に

総長 召命の危機について話すとき、世界は私たちが住んでいるところよりもずっと大きいということを考えてみましょう。これは教会全体についても言えます。たとえば、サレジオ会の召命は現在アジア大陸で大きく開花しており、アフリカ大陸において希望に満ちた未来があります。また、ラテンアメリカにおいて、召命は力強く芽生えており、私たちはしっかりとした養成を忍耐強く行わなくてはなりません。召命はヨーロッパでより困難な状況にあり、東ヨーロッパよりも西ヨーロッパにおいて顕著です。21世紀の修道会は、多少肌の色が異なり、他の言語を話しているかもしれませんが、間違いなくとも生き生きとしたものになるでしょう。私たちはヨーロッパにおいても勇気をもって積極的に若者たちに挑戦し続けましょう。主が全世界において若者を招き続けてくれることを確信しています。

今日、優先すべき
「宣教の領域」は何ですか。
インターネットも
そうでしょうか？

総長 それぞれの地域の具体的

状況によりです。ある地域では意味がない事業が、他ではとても意味があります。たとえば、他宗教の強い世界ではカトリックの教会をもつのは簡単ではありませんが（あるところでは不可能）、職業学校は教育の土台となり、優れた福音宣教の手段となります。どんな国においても事業形態にかかわらず最も大切なことは、どんなタイプの若者たちに向けているかということです。私たちをより必要としている若者たちがいるところ、現実の生活のニーズに私たちが応えたいところ、そこに私たちは取り組みます。デジタルの世界、インターネットは、良い面は利用し、危険性に注意しながら、私たちが存在を示さなくてはならないサレジオ会的「校庭」です。このサレジオ会的「校庭」が近い将来に大きな発展をとげることは間違いないでしょう。

サレジオ会の歴史の中で
どの姿により親近感を感じますか？

総長 私の大きな情熱の対象はドン・ボスコです。もちろん、主イエスこそ私の人生を支配し、

かわる困難に出会いました。しかし、今日までの私のサレジオ会生活35年間は、日々若者たちと共にいることを通して、困難よりも、人生と人生の主と修道会が私に与えてくれた可能性によって豊かなものとされました。人々を活気づけ束ねながらも、若者と共に考え、若者と共に夢を見ることです。

世界の多種多様な文化の中で、サレジオ会はどのように一致とアイデンティティを保てるのでしょうか？

総長 これは私たちが取り組まなければならぬ最も重要な課題の一つです。最も大切なことは交わりを保障することです。共通の幹であるドン・ボスコと、聖霊がドン・ボスコを通して教会に与えたカリスマに、あらゆる人が、様々な方法で参加する交わりが保障されます。誰がなるかに関わらず、総長は全サレジオ家族の交わりの結び目です。

召命の危機（司祭・修道者の減少）は否定できません。
21世紀のサレジオ会の姿はどうなるでしょうか？

支える方であり、私が御父に近づき、聖霊が修道会と私の人生に寄り添ってくださるようお願いいたします。しかし私の大きな愛と情熱はドン・ボスコなのです。ドン・ボスコについて考えるとき、私は感動しますし、トリノのヴァルドッコでドン・ボスコのそばで親密さを味わえたときには心が揺さぶられるのを感じます。

今、総長としてドン・ボスコに私の心が彼の心に似ること、そして彼が感じるように感じ、彼が考えるように考える恵みを与えてくださるよう願います。

略歴

サレジオ会第11代総長

アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父

Fr. Ángel Fernández Artime

1960年8月21日スペインのゴソン・ルアンコ生まれ、53歳。18歳でサレジオ会に入会、27歳で司祭叙階。司牧神学博士、哲学と教育学の学位を取得。スペインで管区青少年司牧担当、オウレンセの学校長、管区評議員、副管区長を経て、2000年から6年間、レオン管区長を務めた。2009年からアルゼンチン南管区長。2014年3月25日よりサレジオ会総長を務める。

GC27

第27回 サレジオ会総会 General Chapter 27 フォトダイアリー

2014年2月18日～4月12日、イタリア・ローマのサレジオ会本部にて6年に1度のサレジオ会総会が開催されました。世界各地から議員207名、オブザーバーが13名が一堂に介し、様々な話し合いがなされました。日本からは、アルド・チブリアニ管区長と本誌編集長の山野内倫昭副管区長が参加。山野内神父がその様子を参加者の目線で紹介します。

文・写真／山野内倫昭神父
マンガ／Daniel Federspiel 神父 フランス



「で、君は、どこから来たの?」
「サレジオ会員なら誰でも同じさ、ベッキで生まれたんだ」



2月23日 11:00、サレジオ会の創立者ドン・ボスコ生誕の場所コレ・ドン・ボスコでミサをささげました。



「“世界を目覚めさせるため”
に来たんだ」
「でもパジャマを着替えるのを
忘れたね」



3月19日、この日は聖ヨセフの祝日でした。18:00～、パチカンのシステリーナ礼拝堂で総会議員たちのための特別コンサートが催されました。



4月6日、パチカン・サンピエトロ広場でヴァルサリチェのサレジオ・ユースセンターの青少年たちと記念写真。210人がこの日の12時のお告げの祈りに参加しました。



「私はインターネットやSNSでコミュニケーションしてるよ」
「私は……伝染させることによってだ」
(喜びを伝染させよう!)



3月25日、ドン・ボスコの10番目の後継者（総長）としてスペイン人のアンヘル・フェルナンデス神父様が選ばれました。21:00から催された晩の祝賀会で、ローマのサレジオ会修練者たちとギター伴奏する新総長。



3月25日 21:00～、全世界のサレジオ家族の代表メンバーで、新総長を囲むアカデミアを開きました。写真はフランス・南ベルギー管区のフェデルスビエル管区長。本物のビエロです。



3月30日、およそ120人のサレジオ会員がアッジの聖フランシスコ大聖堂を巡礼、お墓の前で祈りました。



3月31日、パチカンのサラ・クレンメンティーナにて教皇フランシスコと謁見。一人ひとりと挨拶した後、全員と記念写真を撮りました。教皇を見送る会員たち。

World Salesian Family NEWS INTERVIEW 世界のサレジオ家族ニュース インタビュー フェルナンデス総長の母 イザベルさん

第27回総会で総長に選出されたフェルナンデス神父は、初めて最高評議会メンバー以外から選ばれ、その人となりはあまり知られていません。新総長の素顔に迫ろうと、スペインのサレジオ会会報から、総長の母イザベルさんへのインタビューを紹介します。



総長の両親、妹、姪

息子さんがサレジオ会の新しい総長に選ばれたと最初に伝えたのは誰ですか?

イザベル 最初に伝えてくれたのはレオンの管区長ホセ・ロドリゲス・パチエコ神父様でした。とてもびっくりして、信じられませんでした! その後に、前総長チャーベス神父様からも電話がありました。私は胸がいっぱいで泣いていたので、神父様に何も言えませんでした。総長秘書のファン・ホセ・バルトロメ神父様やフィリベルト・ロドリゲス神父様（広報顧問）からも電話をいただきました。

知らせを聞いてどのように感じましたか?

イザベル 「主よ、助けてください。あの子はあなたを必要としています」と言いました。でも、どう考えたらいいのかわかりませんでした。総長は大きな責任ですし、そのためにたくさん難しいことに立ち向かわなくてはならないので、心配しました。でも…希望もありました。息子にはいつも言ってきました。神様は埋もれさせるために才能をくださったのではなく、人に与えるためにくださったのだと。母親として、息子がどれほど素晴らしい価値をもっているか、知っています。

電話があったとき、何と言ったのですか?

イザベル 息子からはすぐに電話はありませんでした。最初の知らせを受けてから2時間以上たって、息子と話しました。総長に選ばれたと

もう知っている伝え、必要なときは神様が助けてくださると言いました。アンヘルは、たくさんの人が助けてくれるから心配しないと言っていました。とても短い会話でした。その時、息子はとても忙しく、後でまたゆっくり電話するからと言いました。

どのようにサレジオ会と出会ったのですか?

イザベル 私たちの人生は神様の手に導かれています。私の主人は漁師で、私は主人のとった魚を売っていました。ある日、アンヘルが9歳のとき、レオン市に住むサレジオ・ニコペラトリー会員で、私たちの親しい友人であるマリア・サンチェス・ミニャンブレスさんが、（ルアンコから200km離れた）自分の町のサレジオ会の学校で勉強したくないかとアンヘルに尋ねました。アンヘルは考えてみると言いました。翌年10歳のとき、アンヘルはその学校へ行って勉強すると決めました。その4年後、ルアンコに戻って高校に入る選択肢もありましたが、アンヘルはそれを望みませんでした。レオンに残ることを望みました。そのときからサレジオ会は息子にとって特別なものになりました。

息子さんの良いところは?

イザベル とても親切で、やさしいし、とても愛情深いです。いつも家族のことを、自分の務めを心にかけています。私たちは、初めから息子に信仰を伝えてきました。私たちの家庭はいつも信仰に支えられた家庭でした。

家に帰ってくると手料理を食べさせているそうですが、好物は?

イザベル アンヘルは家庭料理が大好きですが、特に野菜が好きです。「アストゥリア鍋」（キャベツ、香辛料の効いたソーセージ、黒ブディング、ベーコン、豆などを煮込んだシチュー）が好きです。もちろん、魚も好きです。アストゥリア地方は、す

ばらしい魚があります。

息子さんに伝えた特別な人生訓は?

イザベル 才能を埋もれさせてはいけない、人に与えるためにそれをいただいたのだと、いつも言って聞かせていました。

息子さんからもらった贈りもので一番うれしかったものは?

イザベル 管区長に任命されたとき、レオンから扶助者聖マリアのご像を持ってきてくれました。我が家ではマリア様の前にはいつもローソクが灯っています。このマリア様が大好きです!

子どものころ、いたずらしましたか?

イザベル とても良い子で、悪さをするとは一度もありませんでした。生まれたとき泣かなかったの、私たちはとても心配しました。でも、少しして突然泣き出しました…それから3歳になるまで泣き通しでした!!

私たちはお手上げになりそうでした。でも、一家で私の両親の家に引っ越し、他の家族が周りになるように泣かなくなりました。幼いころ辛い思いをしたのです。私たちが魚市場で働いている間、何時間も家でひとりぼっちだったからです。

息子さんのために、神様と扶助者聖マリアに何を願いましたか?

イザベル 神様が助けてくださるように祈りました。息子が物事を良く果たせるように手を貸してくださいとお願いしました。神様の助けがなければ、誰も何もできません。サレジオ会は船で、海に出たらうまく舵を取らなければなりません。神様と、先を歩んだドン・ボスコが息子を助けてくださるでしょう。

出典: ANS スペイン 2014年4月17日



総長の故郷、スペイン北部の町ルアンコ



日本からの留学生たち



卒業前のリーダー引き継ぎ



毎週行われるミサ



スポーツ大会



1994年、できたばかりの幼稚園の様子



各地のドン・ボスコの仲間を紹介します

ゆけ、カリタス ボスコニアン！

フィリピンラグナ州 サンタローザ

カリタスドン・ボスコスクール

Go! Caritas
Bosconians!



幼稚園3年、小学校6年、高等学校4年の全13学年あり、
2014年現在では1,400名の生徒がボスコニアンとして本校で学んでいます。

奉仕するリーダー養成

本校のモットーは愛すること、奉仕することです。『Love, therefore, I Serve』奉仕の原点は愛です。このモットーを校舎のあちこちに記し、意識を高めています。また、災害などの被災地を想い、リスマスには盛大なパーティーを控えること、いただいたプレゼントをより恵まれない子どもたちへ寄付すること、支援物資を運んだり、お年寄り・障害のある人と直接関わるなどの活動をしています。加えて生徒間、仲間同士の助け合いのプログラムもあり、学習、家庭問題や友人関係について助け合います。また、SYM（サレジオ青年運動）クラブもあります。これは小学4年生から高校生全員が対象で、宗教活動とリーダーシップトレーニング、タレントを伸ばす場ともなっています。

フィリピンと日本の

文化・習慣・言語の融合

5S（整理、整頓、清潔、清掃、躰（しつけ））や、環境問題への取り組みも全校レベルで実施しています。小学3年生からの日本語の授業では、アニメの影響もあって、日本の食べ物、生活習慣など言葉以外にも皆興味津々です。高校では日本語が選択科目にあり、毎年日本研修旅行を実施して学習意欲を高めています。また日本の

高校生との交流もあります。特に姉妹校、都城聖ドミニコ学園高等学校からは毎年生徒を短期・長期に受け入れ、コミュニケーション能力を高めるとともに、本校生徒たちの自然な信仰、明るさ、ホストファミリーの温かさなど、現地で直接体験していただくことを大切にしています。加えてここ数年は、本校教員を都城に派遣し英語のみで授業をし、イングリッシュキャンプを実施しています。彼らは日本の食生活、規律、仕事の倫理に影響を受けて戻ってきます。このようにお互いの良さを分かち合い、取り入れています。

夢の実現と生徒たちへの夢

校舎の中心にはステラマリスチャペルがあります。ポートの形と祭壇のステンドグラスは、『海の星のマリア』が航海する私たちを導いていることを想起させてくれます。ここには、サレジオ会宣教師、尊者ヴィンセンシオ・チャマッティ神父とアントニオ・カヴォリ神父の日本への40日間の船旅と宣教師精神が大切に込められています。カヴォリ師が生前「あなた方はいつかフィリピンに行くでしょう。そして海の星の聖母の聖堂を建ててください」と言われた夢の実現でもあります。

生徒たちへの夢は、学校のヴィジョン、モットーを生かすことです。そのためには学校

「ドン・ボスコ」が強く息づいているフィリピン。サレジオ家族の一員であるイエスのカリタス修道女会が、ドン・ボスコの名前を頂く本校を設立して早20年。近年、近くに次々と私立校が移転・設立され、学園都市になりつつある中、「最初の学校」として地域の人々との絆に結ばれ、日本の皆さまのご支援にも支えられて、新たな挑戦をしています。

教室なしでスタート

1994年6月に校舎もないまま、できたばかりの住宅街のコミュニティホールを借りてプレスクール（幼稚園）を始めました。屋根だけのホールに柵や仕切りを設けて教室に。21人の生徒と2人の現地の先生、そして助けなしにはやっていくことのできない3人の日本人シスターたちによる、小さく貧しいスタートでした。

共に働く若者たち・良い協働者

サレジオ教育を身につけた現地の協働者が与えられたことは、学校の基盤を築くための重要なポイントでした。学校設立と同時に、日曜日には近くの巡回チャペルでオラトリオ（教会学校）を始め、ことができたのも協働者のお陰でした。そして数年後には、協働者の中からシスターが生まれました。

で、家庭で、地域の中で、関わる人に良い影響を与え、ひいては社会で不正と権力、利己的で私腹を肥やすことに与しない強さと福音の価値観をもつことが必要です。シンプルに謙虚に生きること、ごく普通のやるべきことを一生懸命により良く果たすこと、喜んでもう一步苦勞することを選択できる人になつてほしいのです。

"Education is a matter of the Heart".....教育は心の問題だ

私たちは、このような卒業生を社会に送り出したいと、環境作り（神様の存在を感じる祈りと喜びの雰囲気、共にいること、親しさ、信頼関係、家族的精神）のために転んでは起き、試行錯誤を繰り返しています。神様のお望みなら、これからもこの地で続いていくと確信しています。

（写真／イエスのカリタス修道女会サンタローザ共同体提供）



カリタス ドン・ボスコスクール

Caritas Don Bosco School
Laguna Technopark, Brgy. Biñan, Biñan,
Laguna 4024
www.cdbbs.edu.ph



卒業生のクラフト作家、花田えりこさんの作品



カンボジアの友だちに送る「愛のポシェット」作り



ゲストティーチャーを迎えて



5年生 森の学校



聖母マリアの小さな使徒会（通称P・A・M）

喜びのある学校

—いつも子どもたちと共に—

東京都目黒区碑文谷

日黒星美学園小学校



校庭で先生と子どもたちが一緒に遊ぶ

1954年に開設されました。隣接するサレジオ幼稚園の教室を仮校舎としてのスタートでした。今年の1年生は61期生です。祈りに始まり、祈りに終わる学校生活の中でも、教師と子どもたちは一緒に、なつて始業前や放課後の時間にグラウンドや体育館で遊んでいる姿があります。子どもたちと教師の距離が近いと言われることが、それはドン・ボスコの教えた「アシスランツァ（共にいる）」を生きようと努めているからではないでしょうか。

喜びのある学校

ドン・ボスコの教育の根幹であり、聖書に基づいた「喜び」を大切にしています。子どもたちが多様な「喜び」を感じられるように、特に「4つの喜び」を意識しています。

1 神と人に愛され・愛する喜び

週2時間の宗教の授業を基盤として、学習・生活、子どもたちのすべての活動を通して、各々が神様から愛されている存在であること、キリスト教的な愛、道徳的な価値観を育み、すべての命の尊さを学び、豊かな心を培うようにしています。

また、様々な宗教行事を「徳の花（神様の愛の行い、人のためになる良い行いや小さな犠牲など）」によって準備し、いただいた恵みに感謝し、心を耕す教育活動に取り組んでいます。

の教育基金になっています。

聖母マリアの小さな使徒会（Piccoli Apostoli di Maria）はP・A・Mと呼ばれ、福祉施設の訪問や宗教行事の協力、発表、まごころ献金の呼びかけなど喜んで人に奉仕する心を育んでいます。

子どもたちは力を秘めた豊かな土地です。神様からいただいたそれぞれの資質や能力の素晴らしさに気づき、自信と喜びをもって活動することができるようなら、子どもたちの未来は明るく開け、豊かな実を結ぶことでしょう。良いこと、美しいこと、真なることへと子どもたちを向かわせるために「いつも子どもたちと共に」生活をしています。

（文 写真／目黒星美学園小学校提供）



目黒星美学園小学校

東京都目黒区碑文谷 2-17-6
www.meguroseibisho.ed.jp

ある日突然、幸福な猫の夫婦に一匹の犬の赤ちゃんが生まれます。フリックスと名付けられたこの男の子は、外見にとらわれず、両親からありのままを受け止められ、のびのびと心優しい青年に育ちます。結末はあつと驚かされますが、温かいものが胸中を満たします。この絵本の魅力は、犬の子が生まれたときの猫の奥さんの「だいにじしてあげて。なんてったって、わたしたちの子どもじゃないの」という言葉のように、他者を排除しない大きな許容です。このように無条件の愛の中で育つなら、異質なものを排斥・攻撃する社会は消えるのではないのでしょうか。（田中直美評）



トミ・ウンゲラー作
今江祥智訳
2002年 B1出版
28頁 1300円＋税

フリックス



堀口順子作 みずうちさとみ画
2012年 小峰書店
183頁 1400円＋税

花実の咲くまで



サレジオ会日本管区編
浦田慎二郎 監修
2013年 ドン・ボスコ社
208頁 500円＋税

いつでも共にいてくれる イエスのことば 100

ドン・ボスコのことば100に続くシリーズ。2000年以上前に中東パレスチナでたったの3年間のみ人びとの前で神からのメッセージを伝える活動を行い、キリスト（救い主）と呼ばれたイエスの言葉を、現代人にも伝わりやすく表現した名言集です。生身の人間として私たちと同じように喜び、悲しみ、苦しんで生きる姿を一つひとつの言葉の中に感ずることができ、現代でもその言葉が生きていることを教えてくれます。世の中が儂く思えたとき、なにげなく聞いて見つけたイエスの言葉に、信頼し支えてくれる手はすぐそばにあるのだと気付かれます。（編集部評）

ありがとう、フォルカーせんせい



パトリシア・ポラッコ作・絵
香咲弥須子訳
2001年 岩崎書店
40頁 1400円＋税

LD（学習障害）児だった作者自身がつても字が読めないことに悩む主人公に、「もちろんだよ。でも、みんなちがってことは、いちばんすてきじゃないか」と心える祖母。子どもたちにこの絶対的肯定感を味合わせてあげたいです。主人公が5年生で出会った運命の人フォルカー先生もやさしさを伝えてくれます。「君は賢くて、それにとっても勇敢だ。一緒に変えてみよう。君は必ず読めるようになる。約束するよ」。信じてくれる人、待つていてくれる人の存在は人を成長させます。受け継いだやさしさの灯は、他の人へと受け継がれていく（中略）。（田中直美評）



“遊び”が大切

道端の花に目をとめ、
その美しさを楽しむ心のゆとり、
余裕が人生を楽しくしてくれます

今回の応援隊員

田中・次生

た な か つ ぎ お

サレジオ会司祭



1968年に司祭叙階。日向学院・大阪星光学院・サレジオ高専で教壇に立つ。2014年の4月から調布教会助任司祭。趣味はカメラ。

最近、私自身とても納得している言葉があります。「一緒に遊ぶ家庭は、一緒に成長していくものだ」（『家族のエネルギー』というガブリエル・ガルボの考えです。一人の人間の成長過程にあつても、人類の歴史上の発展にあつても、遊びが大切な要素であることは、認められています。日本人が大切に育ててきた、習い事も、もともと正せばすべて遊びです。喉が渴いたらお茶をグイと飲めば済むことを、茶道では「なぜあつち向いてはお辞儀し、こつち向いてはお辞儀をしなければならぬのか」などと、面と向かつて聞かれると答えようがありません。茶道という習い事は、文

化であり、遊びだからです。私も学生の頃、教会の青年会の女子学生から誘われて女子大の文化祭に行き、お茶の席に参加したことがあります。即席で作法を学んで臨んだところ、着物姿の女子学生の手前、上品に食べようと少し緊張したのか、お皿の上の丸いお菓子落として、コロコロと皆の真ん中まで転がったのを皆で笑われた苦い経験があります。今だったら「たかが遊びじゃない？」で済ませてしまいますが、なにしろ当時は純情無垢（？）の神学生だったので、真っ赤になったのを覚えています。さて、最近では東日本大震災だけでなく暗いニュースが続きます。殺人、しかも犯人の言葉の中に「相手は誰でもよかった」式の通りすがりのものであつたり、親子間であつたり、何かさびしいものが多すぎます。いろんな理由があるのでしようが、私には今の社会、家庭があまりにも真面目すぎるのではないかと思います。別言すれば、遊びが無くなっているのです。車のブレーキと同じで、遊びが無いから、急ブレーキがかかり怪我をするのです。人間関係も遊びがないからすぐに、殺人にまで行ってしまうのです。私たちは毎日の生活で色々な



「調布教会ルカ福音書を読む会」の方々と一緒に

事があつても、急ブレーキをかけなくて済むように、心に余裕や遊びの空間をもつことを忘れないようにしたいですね。聖書の中の「聖家族」から学びたいと思います。「空の鳥を見よ！ 時きもせず、紡ぎもしない。：野の花を見なさい」と続くマタイの聖書を読むとき、少年イエス様は忙しい大工のヨセフ様のお手伝いをしながらも、マリア様、ヨセフ様と一緒に普通に散歩をしたり、お花の香りをかいでおられたのだなあと感じます。小さい頃から両親と一緒に散歩しながら、いろいろなことを学ばれたのです。そんなイエス様の心の中で小鳥たちが合唱し、野の花たちが美しく咲き誇っていたので、それがイエス様の心を広げ、周囲の人々への優しい気持ちをつくりだしていたのではないのでしょうか。肩の力を抜き、緊張から心を解放する、心の遊びを、私たちも聖家族から学びたいものです。



現地の生徒たちと共に楽しい食事のひととき

中高一貫の男子校であるサレジオ学院（神奈川県横浜市中区）では、2013年度からフィリピン・マニラ市の学校において語学研修を行っている。今回は高校生2年生23名が参加し、3つの目標を掲げ、3月23日より9日間の研修を行った。①少人数クラスの英語での授業を、1日6時間、5日間実施。②東南アジアの豊かさや貧しさを知るため、神の愛の宣教師会の養護施設にて子どもたちの世話、衣服の洗濯、食事の準備を体験。③サレジオのグローバルネットワークを体感するため、カリタス・ドン・ボスコスクール（サンタローザ）の生徒たちとの交流会を開催。

サレジオ学院のフィリピン語学研修

英語で理解・会話するなかで感じる達成感や課題が、生徒たちの今後の活動へのモチベーションにつながると期待している。また、フィリピンの繁栄と隣り合わせの貧しさという現実直面し、多くのことを考えさせられたのもよ

英語で理解・会話するなかで感じる達成感や課題が、生徒たちの今後の活動へのモチベーションにつながると期待している。また、フィリピンの繁栄と隣り合わせの貧しさという現実直面し、多くのことを考えさせられたのもよ



人権擁護室責任者のマリア・グラツィア・カプート シスター

う。交流会ではドン・ボスコを父と仰ぐ同年代の若者と共に音楽、スポーツ、食事を通して親交を深め、サレジオ学院ならではの研修になった。

国連に小さな声を



昨年9月に後援会が発足、12月には念願の女性シェルターが開設された

2014年4月12日午後、サレジオン・シスターズ日本管区本部（東京都調布市）にて、サレジオン・シスターズ人権擁護室責任者のマリア・グラツィア・カプートシスターによる「正義と平和、人権擁護実現のために」の講演が行われ、人権擁護への意識が喚起された。

イエスのカリタス修道女会、武蔵野ダルクを支援



「ダルク」という言葉をご存知だろうか？「薬物依存回復施設」の略で、全国に約60の関連施設がある。武蔵野ダルクとイエスのカリタス修道女会との関わりは2年前から。自身もダルクによって救われた渡辺肇氏が東日本大震災を機に東京に新たなダルクを開こうと事務所を探している時、連絡をしたのがきっかけ。家庭の使徒職という観点からできる支援が続けている。

ようこそ日本へ

2014年3月5日、韓国からサレジオ会司祭・李春燮神父が来日した。現在、三河島教会所属。とくに在日韓国人の司牧にあたっている。李神父は1966年、韓国の忠清南道の天安市生まれの48歳。1999年に叙階後、青少年司牧や社会福祉の分野で働いてきた。「日本のサレジオ会の皆さんの心からの歓迎に感謝しています。韓国の信者の皆さんが喜びをもって信仰生活を送ることができるよう、サレジオの霊性にあつた音楽やスポーツなどを通してサポートしていけたらと思います。はやく日本語でもミサを挙げられるようになって、サレジオ共同体と日本の信者の方々のためにお手伝いできたらと思います」と抱負を語った。



ありがとう！ピサルスキー神父 宣教師として ささげ尽くした人生



1992年5月23日、目黒サレジオ幼稚園にて聖母祭の一コマ

2013年5月6日、93歳で天国に旅立ったニコデモ・ピサルスキー神父。祖国ポーランドから遠く日本の地で宣教師として76年、司祭として67年の生涯だった。優しく、時には厳しさをもって、どんな場所でも宣教の実りを結ぶよう努力を惜しまなかったピサルスキー神父の心には、いつも福音を告げる者としての誇りがあった。

●行動する宣教師

1946年12月に司祭に叙階されたピサルスキー神父は開校したての日向学院と志願院に赴任、生活指導や音楽の授業で生徒に高いレベルを求める厳しい先生だった。学校、小教区、幼稚園と派遣されるそれぞれの場で、持てる力を注いだ。育英高専（現サレジオ高専）では、校長となつて数年で赤字だった経営を健全化、学校の雰囲気を立て直し、教育を充実させた。別府の海の星幼稚園、東京の目黒サレジオ幼稚園では、親しみやすく優しい園長として予防教育を身をもって示した。ある教え子は、「神父様は私にとってお父さんでした」と語る。大分教区の幼稚園をまとめ学校法人「大分カトリック学園」を立ち上げるために尽力し、平山司教に「行動する宣教師」と評された。



ニコデモ・ピサルスキー

Nikodem PISARSKI sdb

サレジオ会司祭。1918年9月13日ポーランド生まれ。1937年来日。育英高専、目黒サレジオ幼稚園など、教育の現場で活躍。1999年別府教会に移り、2013年5月6日、帰天。

（文／サレジオ会）

●宣教の熱意に燃えた若者

1918年ドイツ国境に近いポーランド農村部の町に、11人兄弟の一人としてピサルスキー神父は生まれた。14歳でサレジオ会志願院に入り、1937年に誓願を立てた。当時の総長リカルド・ネ神父は、1000人の会員を宣教師に派遣することを教皇に約束し、ポーランドでも多くの若い会員が宣教師に志願した。その中にピサルスキー師もいた。7人の仲間と共に1937年11月22日に来日、チャマティ師のもとで指導を受けた。時代は第二次大戦、その影響を受けて養成を中断し、長野の野尻に疎開していた時の涙ぐましいエピソードがある。ピサルスキー神父ともう一人は毎朝、乳牛を野原に連れて行き、牛が食べる草を観察、同じ野草を集めては皆で飢えをしのいだという。

1996年の司祭叙階50周年は、ローマでヨハネ・パウロ二世と共に祝った。2008年12月3日、来日したポーランド大統領より聖フランシスコ・ザビエルの祝日に勲章を授与されたことは、ピサルスキー神父の宣教師としての奉仕と恵みを飾る目に見えるしるしである。

2007年に脳血栓で倒れて以来、晩年は病の苦しみを捧げる日々だった。それでも、世話をしてくれる人たちにいつも微笑み、ニコデモの名前にかけて「ニコニコ神父」と親しまれた。好きな聖書の言葉は聖バルトロマイの祝日に読まれるもの。故郷の聖バルトロマイ教会で洗礼を受け、宣教師として生涯をささげたピサルスキー神父の心を語る。「いかに美しいことか山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え、救いを告げ、あなたの神は王となられた、とシオンに向かって呼ばれる。」（イザヤ52・7）

「彼はなすべきことをした」と同期で同郷のモスカ師はピサルスキー師の生涯を要約する。宣教師として奉仕に生きたピサルスキー神父のひたむきな姿は、ドン・ボスコに倣いイエス・キリストに従う私たちの歩みを力づけてくれる。私たちはその生涯を神に感謝してやまない。ピサルスキー神父様、ありがとうございます！

**ドン・ボスコの風
読者プレゼント**

お名前(フルネーム)・住所・年齢・ご職業とご希望のプレゼント(A・B・C)いずれか一つを明記し、本誌のご感想・ご要望をお書き添えの上、Eメールまたはハガキで下記宛先までお送りください。

「ドン・ボスコの風」 編集事務局

当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。
ご応募いただいた方の個人情報は賞品の発送のみに使用し、
その他には一切使用致しません。

編集後記

今年8月16日からドン・ボスコ生誕200周年の祝賀期間に入ります。ドン・ボスコは、1875年に一番最初の宣教師たちをアルゼンチンに派遣しました。これまでも多くのサレジオ会員とサレジアン・シスターたちが、ドン・ボスコが建てた扶助者聖マリア大聖堂から派遣されています。現在では132か国で活動するサレジオ会を始め、サレジオ家族には30のグループがあり、所属メンバー総数は40万人、その他27グループが所属を望んでいます。今号を通して少しでも多くの方々に宣教の意義と宣教師たちの証に触れ、フランス司教皇の言う「福音の喜び」の招きに心燃えていただければ幸いです。(M)

No. 13

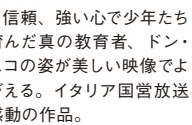
SALESIAN BULLETIN JAPAN July 2014
2014年7月10日発行（年2回発行）

編集人 山野内 倫昭
 発行人 アルド・チブリアニ
 発行所 カトリック・サレジオ修道会
 「ドン・ボスコの風」編集事務局
 〒160-0004
 東京都新宿区四谷1-9-7
 ドン・ボスコ社内
 電話：03-3351-7041
 F a x：03-3351-7042
 Eメール：DB-no-kaze@donboscojp.org

編集・デザイン制作 ドン・ボスコ社
印刷所 日之出印刷株式会社

本誌掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。
© カトリック・サレジオ修道会 2014

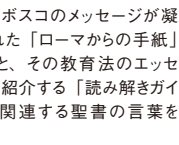
DVD
ドン・ボスコ



ロドヴィコ・ガスパリーニ監督
日本語吹替版 200分

5名様

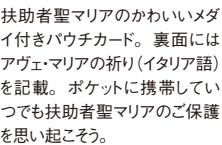
こころの教育者
ドン・ボスコの
「愛の教育」



サレジオ会日本管区 編
浦田慎二郎 改訳・監修

5名様

**扶助者聖マリア
メダイ付き
パウチカード**



イタリア製
メダイ部分 44×33mm

5名様

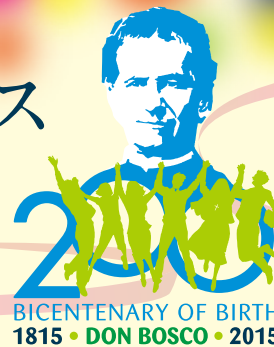
(いずれもドン・ボスコ社提供 www.donboscosh.com)

次号No.14は2015年1月発行予定です。「ドン・ボスコの風」バックナンバーは、サレジオ会ホームページ <http://salesians.jp> でご覧いただけます。
トップページの「ライブラリー」→「ドン・ボスコの風」



ドン・ボスコ 生誕200周年 ニュース

**2015年8月16日はドン・ボスコの200回目の誕生日！
ドン・ボスコ生誕 200周年をみんなで盛大にお祝いしよう！**



日本では、2014年8月16日～2015年11月23日を祝賀期間とし、記念行事など各種イベントを予定しています。

日本のサレジオ家族は「ひまわり」を、ドン・ボスコ生誕 200 周年を記念する花として育てます。あざやかな黄色の花が咲きならぶひまわりは、ドン・ボスコの「よろこび」「明るさ」にぴったりですね。ひまわりのように、私たちもいっしょに神さまに向かって歩み、笑顔でまわりの人に生き生きとしたよろこびを分かち合いましょ。



2014 年 9 月 15 日（祝）サレジオ家族合同で、200 周年開始式
サを次の 5 か所で行います。東京／カトリック碑文谷教会、大阪
大阪星光学院、長崎／カトリック植松教会、別府／カトリック別府
会、宮崎／イエスのカリタス修道女会宮崎修道院。どなたでも参
いただけます。（開催時間など詳細は決まり次第ホームページでご
案内します。）

ドン・ボスコゆかりの地を巡るツアーを企画しています。ドン・ボスコの歩んだ人生を実感し、共に祝うこの機会に、ふるってご参加ください。（詳しくは本誌の裏表紙をご覧ください。）

「みんなで描こう!ドン・ボスコ」「みんなで歌おう!ドン・ボスコ」「みんなで着よう!ドン・ボスコTシャツ」の記念コンテストは、計1500人を超える皆さまからご応募いただきました。ありがとうございます。現在、応募作品を展示する特設ホームページを2014年9月公開に向けて準備中です。(募集は、2014年3月末をもって締め切らせていただきました。)

ドン・ボスコについて、基本的なことから学んでいく講座を2か月に一度開催しています。講師は浦田慎二郎神父。平日午前中ですが毎回大盛況です。6回目は、10月2日10:30～12:00、サレジオ会研修施設サイテック(カトリック下井草教会斜め向かい)にて。参加費1000円。どなたでも参加いただけます。

世界的なイベントは、2015年8月11～16日、トリノおよびコッレ・ドン・ボスコ（ベッキ村）で、青年の集い（Bosco Camp of the Salesian Youth Movement）が開催されます。日本からも青年を派遣する予定です。日本国内では、2015年秋、中高生や学生を中心とするイベント（Salesian Youth Day）を開催する予定です。（詳細は決まり次第お知らせします。）

それぞれの学校、同窓会、教会、活動グループで、200 周年記念イベントを自由に企画・実行してみませんか？ ドン・ボスコのことを学んだり、知らせたり、ドン・ボスコの仲間とつながりを広げたり。Facebook「ドン・ボスコの風」にその様子を投稿して、みんなでシェアしましょう！

ドン・ボスコがもっと身近になる、200 周年記念グッズや出版物を現在、企画・制作中です。かわいいキャラクターグッズも登場予定！

どうぞお楽しみに！（詳細は順次お知らせします。「ドン・ボスコ社」のネットショップ <http://www.donboscosha.com> もぜひご覧ください。）



写真は試作段階のサンプルです。

ドン・ボスコ生誕 200 周年に関して、詳しくは
サレジオ会日本管区ホームページ (salesians.jp) 内
「ドン・ボスコ生誕 200 周年」コーナーをご覧ください。

✚ ドン・ボスコ生誕200周年 記念巡礼ツアーのお知らせ

ドン・ボスコゆかりの地を巡る

Don Bosco Bicentenary of Birth Pilgrimage Tours

全行程添乗員同行

教職員向け

旅行日程

2014年12月26日～2015年1月3日 9日間

- ・参加対象／サレジオ家族関連学校 教職員向け
- ・訪問主要都市／トリノ、フィレンツェ、アッシジ、ローマ(教皇に謁見)等
- ・旅行代金／363,000円～398,000円(参加人数によって変更があります)

【お申し込み・お問い合わせ先】

近畿日本ツーリスト株式会社 首都圏西団体旅行支店 担当：藤田・小沢
TEL.042-847-6161 FAX.042-847-8328

信徒・一般向け

旅行日程

2015年4月22日～5月2日 11日間

- ・参加対象／小教区信徒・一般の方
- ・訪問主要都市／ミラノ、トリノ、アヌシー、アッシジ、ローマ等
- ・旅行代金／372,000円～419,000円(諸事情により変更になることがあります)

【お申し込み・お問い合わせ先】

株式会社ステラ・コーポレーション 担当：小池俊子
TEL.03-3407-1218 FAX.03-3407-1582 E-mail.info@stella-corp.co.jp

サレジオ家族向け

旅行日程

2015年5月21日～29日 9日間

- ・参加対象／サレジオ家族
- ・訪問主要都市／トリノ、ファエンツァ、ロレート、ローマ(教皇に謁見)等
- ・旅行代金／未定(下記までお問い合わせください)

【お申し込み・お問い合わせ先】

近畿日本ツーリスト株式会社 首都圏西団体旅行支店 担当：藤田・小沢
TEL.042-847-6161 FAX.042-847-8328

教職員向け

旅行日程

2015年8月20日～28日 9日間

- ・参加対象／サレジオ家族関連学校 教職員向け
- ・訪問主要都市／トリノ、フィレンツェ、アッシジ、ローマ(教皇に謁見)等
- ・旅行代金／未定(下記までお問い合わせください)

【お申し込み・お問い合わせ先】

近畿日本ツーリスト株式会社 首都圏西団体旅行支店 担当：藤田・小沢
TEL.042-847-6161 FAX.042-847-8328

信徒・一般向け

旅行日程

2015年10月15日～23日 9日間

- ・参加対象／小教区信徒・一般の方
- ・訪問主要都市／トリノ、ファエンツァ、ロレート、ローマ(教皇に謁見)等
- ・旅行代金／未定(下記までお問い合わせください)

【お申し込み・お問い合わせ先】

近畿日本ツーリスト株式会社 首都圏西団体旅行支店 担当：藤田・小沢
TEL.042-847-6161 FAX.042-847-8328

写真：ローマ/バチカン
サン・ピエトロ大聖堂写真：トリノ近郊
コッレ・ドン・ボスコ周辺の
田園風景写真：トリノ
ドン・ボスコの
事業発祥の地

紙面に掲載の情報は2014年6月24日現在の情報です。
未定の情報・詳細等は各お問い合わせ先にてご確認ください。

各ツアーのお申し込み締切は、催行日より2ヶ月前まで

※各ツアーの行程は諸事情により変更になることがあります。予めご了承ください。

※上記旅行代金には空港施設使用料、空港諸税、運送機関の課す付加運賃・料金(燃油サーチャージ等)が別途かかります。